

特別展「唐端清太郎と相生の発展」を開催

10月24日から11月8日まで、相生市立図書館二階思索の広場で、特別展を開催しています。
唐端清太郎(雨香散史うこうさんし)は、相生市の基礎を築いた人物です。

唐端清太郎は文久2(1862)年4月に飾磨郡谷外村(現姫路市飾東町)で生まれました。志を抱いて上京、青森東奥義塾で法学を学び、青森新報社に入社しました。生家の事情により帰郷して兵庫県に就職、明治18(1899)年、上司の赤穂郡長就任とともに赤穂郡役所に転勤し郡長を補佐する書記となりました。

明治25(1892)年、相生村(おうむら)は唐端清太郎を村長として招聘します。当時、相生村は人口約5400人の寒漁村でした。唐端清太郎は、大正5(1916)年まで20年余りにわたって相生の行政に尽力し、大正2(1913)年に町制を施行、相生が造船業を擁する近代工業都市へ発展する道を開きました。

この間、明治36(1903)年県議員に当選、明治40(1907)年県会議長に選ばれています。大正2(1913)年、立憲同志会の創立に参加、大正6(1917)年、憲政会から代議士に当選しました。当時の村長は名誉職で、唐端清太郎が役場に来る日は少なかったのですが、相生に来た日には自宅に職員を呼んで指示を与えたといわれています。唐端清太郎は、主に神戸で活動し、阪神政財界に幅広い人脈を有していました。水産業の振興に尽力する傍ら、相生を「西の神戸」にすることをめざし「造船所を創れば船が入り人が集まる」と考えて、明治40(1907)年、播磨船渠株式会社を設立します。唐端清太郎は専務に就任しますが、船渠の建設は難航して会社は破綻、唐端清太郎は邸宅を失い下宿に移ります。船渠工事は播磨船渠合名会社が引き継ぎ、五年にわたる難工事の末、明治45(1912)年に完成しました。初期の播磨造船株式会社は船渠一つで修繕船中心の小さな造船所でした。第一次世界大戦が始まると、唐端清太郎は鈴木商店に造船所の買収と拡張を提唱、大正5(1916)年、鈴木商店は株式会社播磨造船所を設立します。鈴木商店の資本と人材によって播磨造船所は有力造船所に成長、相生の人口は急増し町の近代化が進みました。

今回の特別展では、唐端清太郎の生涯を振り返り、大正2(1912)年から大正3(1914)年にかけて相生で発行された町を写した絵葉書と小さな造船所「播磨造船」の写真帖から選択した写真で、町制を施行した頃の相生の様子を紹介しています。



町村制度未来之夢(ちょうそんせいどあしたのゆめ)

「町村制度未来之夢」は、唐端清太郎が26歳、赤穂郡書記であった頃の著作です。この時期は、日本の政治制度の変革期でした。帝国憲法が明治22(1889)年2月11日に公布、明治23年(1890)11月29日に施行され、憲法施行とともに第1回帝国議会が開催されています。地方制度の再編は憲法より一年先行し、明治21(1888)年4月法律第1号(前半は市制、後半は町村制)が公布され、明治22年(1889)4月から順次施行されました。

町村制度実施とともに、赤穂郡の東部に、相生村・那波村・若狭野村・矢野村が成立し、この四カ村が合併して現在の相生市になっています。

こうした法制度・政治制度の改変にあわせて、唐端清太郎は、明治21(1888)年に「町村制度未来之夢」、明治22(1889)年に「政海の波 憲法講談」を大阪の駸々堂から上梓しています。「町村制度未来之夢」は、村長は名誉職であるべきか、選挙の実務、税制のあり方など、地方政務に関わる人々の疑問に答えながら、雨香散史と梅村春野の恋愛小説風に叙述が展開していきます。

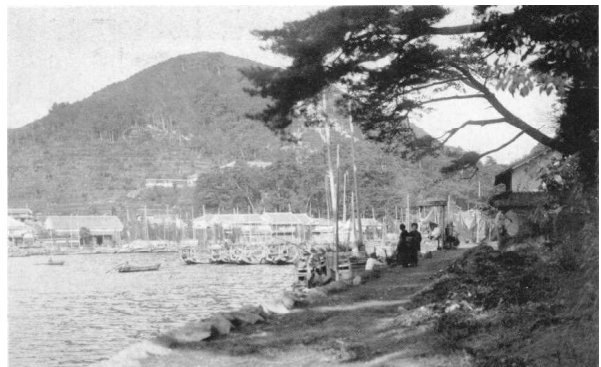
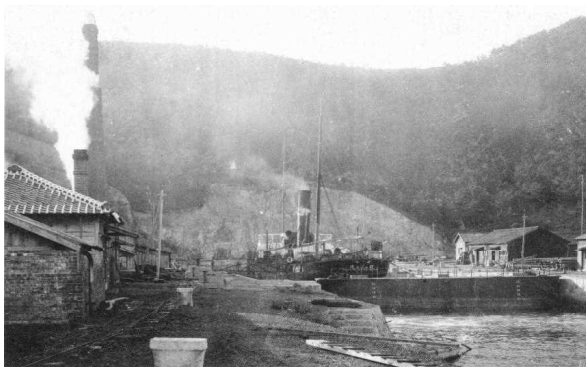


「町村制度未来之夢」は活字本ですが、平仮名が現行と異なり、旧仮名遣い・旧漢字のため現代人には読みにくい面があります。そこで、平仮名・仮名遣い・漢字を現行のものに改め、読みやすくしたテキストを作りました。特別展会場で御覧になれます。

なお、「町村制度未来之夢」「政海の波 憲法講談」の原文は、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されています。また、現代版仮名遣いの「町村制度未来之夢」は、相生市立歴史民俗資料館所蔵本から起こしたものです。

大正時代の相生

特別展では、大正3(1914)年に、久我商店が発行した絵葉書を展示しています。



左 播磨造船株式会社の船渠 動力はボイラーを使用していました。

右 相生港の南海岸 和服姿の女性二人と漁師が話しています。

天神山の中腹に見えるのは相生小学校。